広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	日本のシャーマニズム
Author(s)	ファニ レイーラル,
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集 , 1991 : 89 - 94
Issue Date	1992-03-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039308
Right	
Relation	

日本のシャーマニズム

ファニ・レイーラル

昔から人間は「いったい死の後はどうなるのでしょうか」と尋ね続けて来ました。今でもその根本的な質問は未解決ですけれども色々な仮説があります。仮説よりも確信を持っている人がいます。が、合理的な証拠のない自信だと思います。世界中、文化と同じように信仰は大変違いますが、共通点があると思います。それは「死」の概念です。その概念によって人の生活の概念も変わります。大ざっぱに分けたら三つのカテゴリーがあると思います。

1　この世（今生きている世界）はあの世の存在（精霊神々、大神）によって司られています。つまりあの世からこの世に一方的な権威関係がありそうです。

2 死の後は無です。つまり死は果てです。

3 その1と2の間には色々な“段階”がありますが一つはこの世とあの世の間に相互的な影響があるという考え方です。その交換をこのレポートの課題にしたいと思います。右にあげた二つの概念にはさまれたこの幅広い範囲には「シャーマニズム」ということがあります。先ず「シャーマニズム」という言葉そのものについて話します。

「シャーマニズム」は一般的に呪術、宗教現象、形態を表します。シャーマニズムとは呪術、宗教的な職能です。その語マンシュー・ツンングーズ系緒族語「sǎman」とか「saman」に由来すると見られています。民族によって言葉も違いますので類似職能者を指すのに別の名称が多いのです。ところが「サマン」が十九世紀にロシアで始まったシベリア民族の研究では当然その場の言葉として「シャーマニズム」を使うことになりました。そして専門家が研究を他の地域に広げていくにつれて同じ語彙を使ったので今のところ世界中の宗教研究の固有の言葉であるわけです。いまはその言葉は多彩多様な宗教現象を表します。

もう一つの仮説があります。サンスクリット語のシュラマナ(śtamana)やパリ語のサマナ(samana)という起源がありそうです。ともかくいずれにしてもそれは〈沙門〉出家者を意味します。

北アジア、シベリア、以外の諸地域出の宗教職能者を霊媒(medium)と呼ぶ専門家も多いです。

さて「シャーマン」という語の由来は一つの問題ですが、いったい何を含めるのかは別問題です。やっぱりその定義は学者の数と同じぐらい多いです。が、「シャーマン」の特質をあげたらその基本的な定義が分かると思います。

1-神や精霊との直接接触からその能力を得ます。(イニシエーション)

2-その交通によって役割をはたします。

3-役割をはたす間はシャーマンは異常な精神心理状態になります。

つまりシャーマンは、超自然的存在から常と異なる才能をもらって、その存在と関係できる者です。異常な精神心理状態というのはシャーマンだけが陥ることのできる状態だからそんな体験ができない学者にとってはその三つ条件ともが満たされているかないか明確にできません。ここで難しさが発生します。シャーマンといわれる××さんが本当にそうなのか絶対的な判断はできません。神々や精霊と直接に接触するためには異常な状態に陥る必要があります。その状態の形は多種多様ですが一般的にトランスといいます。

トランス
- 憑霊/憑依（ひょうい ひょうい） ポセッション
- 脱霊（魂の旅行）

まず世界中のシャーマニズムの多様性をめぐって、例をあげたいと思います。

ＩＭ・ルイスによると、東西南北を問わず憑霊を大きく分ければ二種類あるといいます・一つはトランスいに伴う人格転換です。もう一つは身体疾患で、それは憑霊の結果です。そしてその二つの状態を合わせたケースもあります。同者によるとアフリカのソマリ族で憑霊状態に陥いた人が暴れ廻ったり、失神、昏倒、嘔吐、身体衰弱などにかかっています。

インドネシアやマレシには“トラ憑（つ）き”という現象がありますが、虎のように振舞い、狂乱状態になり、虎のような仕方で食べるわけです。人類学者ＭＪ・フィールドはアフリカのガーナの憑霊について調査しました。特徴として憑霊の短さをあげています。持続時間は大体一時、二時間で、丸一日続くのはまれです。通常意識に戻ると、憑霊の間に行ったもの、自分の行動について、全然記憶がありません。その心的な分離は夢遊症の発作や催眠状態によく似ています。

シンガポールの一つの中国寺院ではほとんど毎日九時にお客が大勢集まって来ます。「生き神の現れ」を待っているわけです。十時ごろ生き神が現れて観音像の前テーブルに座り、数分たつと、両足が震え始めます。それから少しづつ体全体です。客が一人づつ生き神に直接に依頼の内容を説明します。神の返事は生き神の口から出ますが一般の人は分かりませんので通訳をする助手もいます。神の言葉は記録され、お客に渡されています。そのかみを身につけると除魔と招福を促進すると言います。水に溶かして飲めば患者を救うとも信じられています。この憑霊状態を脱すために生き紙は冷たい水を飲まさせるだけです。また、年五回、特別な儀礼の際、生き紙は自分の舌を切りその血で神語を記し、信者にあたえます。そのときお客がいっそう多いことは言うまでもありません。

北極のエスキモー民族にもシャーマンがいます。海洋の女神をよく祈らないと色々な恐ろしい祟（たた）りをうけますので彼女らを鎮（しず）めるようにシャーマンが海底への旅をします。その

出発のとき長靴と手袋以外に何も着ません。村の成人男女はみなその家に集まって目を閉じたまま静かにしています。シャーマンは守護霊を求めて海底への旅をします。

インドネジアではハヤ（魂）は大体睡眠の間離れると信じられています。この世とあの世との間には橋があります。離れたヤハはあの世に向かって行きます。その橋までにシャーマンは霊を追い戻させますが橋を渡った霊ならシャーマンはどうしょうもありません。

北ベトナームの一部と北ラオスによく似っている一種のしんこうがあります：人間は複数の霊魂をもっているということです。某シャーマンが八一霊を有したともいいます。それらは例えば目、鼻の穴などです。

世界中いくつかの所でシャーマンが複数の霊をもっているのに対して、普通の人には一つしかないという信仰が広まっています。人々が唯一つの霊を失ったら、シャーマンはもう一つを与える場合がありそうです。

アムール地域（シベリアの地区）に住んでいるギリヤークはお金持ちの人が他の人よりもう一つの霊を持っていると考えられていますが、その中の一つは山から、一つは海から、一つは空から、最後の一つは地下からくると言われます。ここでは財産によっての区別も見えて、何とか社会的な階級制にともなった宗教的な階級制が見えるような気がします。

そしてよく知られているように、インドでは牛が聖なる動物で、その霊魂は祖先の霊だからです。

日本におけるシャーマニズム

日本ではシャーマニズムがほとんど消えましたが、今でも二カ所に残っています。一つは東北地方で、もう一つは琉球列島です。

日本におけるシャーマニズムで一番著しいのはその“多様性”です。人類学者R・ファースは日本のシャーマニックな職能を三つのカテゴリーに分けました。

1　シャーマン

2　霊媒（ｍｅｄｉｕｍ）

3　予言者（ｐｒｏｐｈｅｔ）

ファースによるとシャーンは精霊の主人あるいは精霊の統御者です。一方善霊と悪霊を支配して、他方守護霊の援助をもらってこの世からあの世までの旅行ができます。その統御者の役割をよく果たさないと人間が悪霊に祟られると信じられています。それに対して霊媒とは“神・精霊の乗り物〃です。神や精霊が霊媒の身体に着き、それを使ってこの世、我々と関わるようになるという意味です。霊媒の口を使って願い、判断、諌めを表します。ファースにとって、予言者はあの世の存在の影響を受けますが、霊媒の場合と違ってその存在が身体に入らずに外から指示します。その合図は予言者にしか見れないので普通の人のために解釈する役割を果たさなければなりません。予言者が憑霊を決め、託宣や予言を行うとき彼の役割になります。だから、はっきりとした区別はないとよく分かるでっしょう。

憑いた精霊が第一人称で話します。東北地方でイタコやカミサンと名付けられているもので、女性が圧倒的に多いです。彼らの第一の役割は“口寄せ”です。“口寄せ”とは死者の魂を語らせるというものです。地域によって差異がありますが、死後初めての口寄せを行うのに期限があります。大ざっぱにいうと死後百カ日以内に行わなければなりません。四九日以内に行われなければならないのが過半数です。百カ日以内の口寄せを“新口寄せ”といいます。それ以降は“古口寄せ”といいます。その職能者は、東北地方で祈祷師、行者、オガミャ、オガミヤ、カミサン、琉球ではホウニン、ホイン、ユタ、などと称します。

著しいのは、彼らが過半数盲人であるちうことです。生まれつき盲人もいますが最近まで麻疹のせいで盲人になってしまった人も多かったようです。その人は他の人と同じような仕事はできませんが、生活費を稼がないといけません。だから昔からその役割は彼らの固有の職業です。時に盲人自信がその道を選びますが、家族や親戚に勧められる場合いが一番多いです。盲人でない人の場合、なぜこの道を選んだのかと尋ねると、それは巫病にかかられたからだとよく聞きます。例えば普通のひとが急に異常な病気にかかって入院して、どうしてもその病気の原因も治療も分かりません。お医者さんも専門家も全然助けられませんので、巫女の判断を頼みます。悪霊が憑いたばあいには巫女がそれ祓うと病気もよくなります。けれどもその異常な状態が悪霊のせいではなくて、神様が憑いたとすると祓えません。巫道にはいるよりほかしかたがないと命じます。その場合では病気は神様の印です。そのような病気にかかった人は巫覡にならなければならないという天からの指示です。そんな病気にかかった人は圧倒的に女性が多いです。病気のためにではない異常な状態に陥るケースもあります。某女性が、急にはっきりした理由もなく、夫と関係を断って、絶えず争いが行ってくる場合などもあります。そうしたら巫女は「神様から選ばれたこの女性が“一人前”（巫女）にならなければなりません。」という解釈をします。時々女性自身がトランスに似ている状態に陥ってその判断をします。女性がシャーマンになろうとしたら、選ばれた神の奥様と考えられ、同僚の巫女から、もとの主人との結婚はもう認められません。だいたい巫女は独身ですが、結婚した女性ももちろにます。人間である主人は二番目の夫として考慮されていて、本当の旦那さんは守護神だ思われています。ともかくどちらのケースにしても巫覡になるのに修行とイニシエーションを得ないといけません。今からちょっとそれについて話したいと思います。

十三才ぐらいの子供の頃に師巫に紹介してもらってその家で勉強し始めます。それは何年間もの続勉強です。勉強するのは神、精霊を呼ぶための歌、そして儀式の道具の使い方などです。それぞれ地域によって、あるいは同地方でも師巫によって違います。呪文は長くて難しい古語の言葉です。そのうえ書いたものがないので弟子にはいっそう勉強しにくいようです。学者にとっても資料がないので不明瞭なところが多いのです。弟子はだいたい師巫のところに住んでいて、先生のために朝早くから晩まで掃除、水汲みなど家での雑用

をします。両親と離れ、つらい仕事にせめられちるその期間は忘れられない不幸な思い出だと読みました。女の人の入門は早ければ早いほどいいのです。初潮までに師巫のもとに入りしなければならりません、そして初潮までにイニシエーションをしたほうがいいのだという人もいます。入門した人の一日の生活はだいたい同じようです。毎朝早く起きて、水汲みをして一日中ずうっと家事にがんばって、そして先生の暇な間に勉強します。勉強は口伝えです。先生が言いったのを繰り返して、間違いなく全部記憶しなければなりません。少しでも間違ったり、ちゅうちょしたりすると厳しく叱られます。勉強したのを忘れないように夜も繰り返します。いい記憶力に恵まれない人にとってはなかなか大変な体験です。先生は子供を働かせるだけではなく、両親からもお金や米ももらいます。少なくとも二~三年間経って、師巫は少女が充分に修行したと思うときイニシエーションをさせます。イニシエーションとは神憑け式を得て入巫するちうパターンです。その儀式のため師巫はまた弟子の家族からお金や贈り物をもらいます。。イニシエションの儀式に臨んでうぎめにあります。それはいつも真冬のときに行われています。イニシエーションの前の十日間ぐらいは精神的な準備です。弟子は毎朝夜明けに起きます。薄着で外に出てその辺りに滝があったら、滝に叩かれます。滝がなければ、近い川また井戸の冷水で体全体を祓います。十日間でちょうど三万三千三百三十三杯を自身に注ぎます。それは水ごり垢離といいます。朝の水垢離を終えて部屋に一日中籠もります。十日間は五穀（米、麦、キビ、アワ、豆）も、肉や魚も食べません。そのうえ、火で作った料理や少しでも暖めた料理も絶対に口にしません。お酒や温かい飲み物もそうです。部屋には暖房はありませんし、他の部屋にあっても入るのは禁止されています。十日間厳寒で冷たい水で体を祓って、そしてそのままで寒い部屋でほとんど食べずに一日中呪文を唱えたり供え物を供えたりして夜遅くまでで起きていのですから若者が精神衰弱状態に陥ることはよく分かると思います。イニシエーショの１日まで弟子と師巫しか部屋には入れません。そしていよいよ儀式の日がくると家族がみんな師巫の部屋の奥に黙って座りにきます。弟子と師巫は特別な無垢な着物を着て神事を始めます。始めに師巫はほとんど何もしません。弟子が供え物を供えたり、祓詞、呪文、祈願を連続に繰り返したりします。弟子は家族の前で不合格の恐れでいっそう緊張するに違いありません。何とも薄気味悪い雰囲気が漂っています。しばらくして弟子はトランスに入ります。気が失ったような状態に陥ります。が、話し続けます。その時師巫が弟子に白と赤の紙の御幣（房がついている筒みたいな神祭用具）を持たせ「何の神が憑いたか」と聞くと「××神だ」と答えます。　神が初めてその弟子の口を使って話しかけるのです。これは弟子がよく修行して合格したという意味です。その日に憑いた神は弟子の守護神です。エビスなら、観音菩薩なら、○○如来なら、その神をよく拝まなければなりません。間もなく弟子は正気に戻って、しばらく休みます。そして合格を祝うのに宴会（美食）を行います。（それが家族の費用であることは言うまでもありません。）その後師巫が必要な道具を弟子に渡すと、弟子が“一人前”（巫女）になったという意味です。今は巫女の

資格を得ました。しかしながらまだまだ独立しなくて、少なくとも一年間はお礼として先生の所で働き続きます。独立すると、自分の家に戻って部屋をもらって自分の“商売”を始めます。お客が訪ねて巫女の判断を求めたり、死者が出ると巫女を読んで口寄せを行ってもらったりします。独立した人は先生の役割（師巫）を果たすことができます。

先に巫女の道具について触れましたのでもう少し説明しましょう。道具は色々ありますがよく使用されているのは弓、太鼓、御幣、数珠です。弓や太鼓ならそれを叩きながら呪文を唱えてトランスに入ります。

口寄せは巫女の基本的な役割だからその大略を説明したいと思います。家族がなぜ巫女に頼んで死者に話させるかというと、死の原因を明らかにするようにとか自殺の理由を分かるようにしたいとかで、巫女を頼む場合が多いそうです。死者の魂が話すことによって鎮静できますのであの世につけると信じられています。死者の霊魂は死後、直接に天界に行かず七日間にの屋根を越えません。早く初めての口寄せ（新口）を行った方がいいのだそうです。そうすると魂をあの世に送ることができます。ともかく一周忌（四九日）の末までに話させないといけないとよく信じられています。そうしないと死霊が鎮められなくて家族に祟ります。口寄せを行う前に巫女が死者の名前、年齢、性などについて調べておきます。そしてほとんど訳の分からない言葉をつぶやくと死者の霊魂が彼女の口を使って話し始めます。急に彼女の声色が変わりますので霊が来たと分かります。声色や話し方は死んだ人のとよく似ているともいいます。話の構造はほとんどいつも同じです。まず霊魂が現在状態、悲しみ、親戚や友達への感謝そして将来についての意見、諌め、戒めを表します。死んだ人が若ければ若いほど口寄せは短くなります。子供の場合なら声はすごく小さいし言葉も多くはありません。子供には魂が弱いだからそうです。初口寄せの後はまた一度か二度わたって口寄せを行うケース多いのですが、その後の口寄せの頻度は家族によって大変違います。　右にあげたのは巫女の一番“日常的な活動”ですが他にも色々ありますし、祭りもあります。覡巫の活躍が東北や琉球で衰弱するとしても、都会には新宗教や占いなど新しい流行があるので、人間の他界への信仰は生き続けているように思えますが、いかがでしょうか。